「気が遠くなる」「本気で泣いた」……皆に悪戦苦闘の過去あり

養老孟司、上野千鶴子、坂東眞理子ほかあの著名人たちはこうして「英語の壁」を乗り越えた

今、国際舞台で活躍している人たちも、最初から〝ペラペラ〟だったわけではない。皆、英語と格闘し、悩み、苦しんだ過去がある。中には、十分世界で通用する英語力を持っているのに、今でも苦手意識を持っている人もいる。英語を操る多くの日本人研究者に、彼らが体験した「英語の壁」についてインタビューした英文校正サービス会社代表の古屋裕子氏が、その秘訣を公開する――。

＊

グローバル時代の今、日本人が英語を使う機会は日毎に増えています。学術分野では、理系はもちろん、文科系研究者も英語論文を書く機会が多い。しかし、日本人研究者がネイティブレベルの英文を書くのは難しいことです。そこで弊社では、日本のビジネスマンや研究者向けに「英文校正サービス」を提供しています。

しかし、実は私自身、英語がとても苦手でした。留学経験はなく、英語の勉強と言えば受験でやったくらい。当然、就職後の「英語の壁」は厳しいものでした。上司の話すことが聞き取れない、伝えたいことが話せない。

一方で、会社の顧客である日本人研究者やビジネスマンが、英語で苦労しているのも、身近に感じていました。

それなら、今では世界で活躍している著名な研究者たちだって、かつては、英語に悪戦苦闘した経験があるのではないか。彼らがどんな「英語の壁」に直面して、どう乗り越えたかを聞くことは、私たちの顧客にも、私自身にも、参考になるに違いない。そう考えて、著名研究者たちのインタビューを始めたのです。

インタビューの人選は、基本的に「20歳を過ぎて英語圏に1年以上滞在したことのある研究者」としました。

30代前半でオーストラリアへ留学した養老孟司さん、すでに社会学者として活動していた33歳でアメリカ留学をした上野千鶴子さんなど、つまり〝大人になってから〟本格的に英語圏の洗礼を受けた方々に話を聞いたのです。

それぞれのお話を伺うと、実際に直面した「英語の壁」は様々でした。

クリムゾン インタラクティブ ジャパン代表
古屋裕子
FURUYA Yuko

最初からペラペラだった人はいない（左から、養老孟司氏、上野千鶴子氏、坂東眞理子氏）。

「英語なんてばかやろうと（笑）」

養老孟司

中でも英語の「読み書き」に関しては、誰もが受験で経験したような困難を、正攻法で乗り切られたことがよく分かりました。つまり、英字新聞や専門書の原文を「とにかく読む」、「単語をひたすら暗記する」などの努力をコツコツされた方が多かったのです。

養老さんは40数年前、博士論文で初めて英語論文に取り組み、「気の遠くなるほど膨大な時間を費やした」そうです。

それでも、さすがは上野さん。「腹をくくって自分をさらけだす」「開き直ってしまえば赤ん坊と同じで『口写し』。相手の言う通りに言う」という方法で耳が慣れると、留学先の環境を物足りなく感じ、ご自身の研究活動にさらなる刺激を求めて、ノースウエスタン大学からシカゴ大学への移籍を自ら願い出ました。

ところがシカゴ大学では、新たな壁に直面したと言います。同大学では、全米から研究者が招かれてスピーチする「マンデー・コロキアム」という公開講演会があり、これが大学の空きポストの教員採用試験になっているそうです。ですから、真剣勝負。

「スピーチが終わるとディスカッションがあり、そのあとの質問タイムも壮絶。大学院生や若手研究者が、先輩格のスピーカーの揚げ足を取るような意地の悪い質問をする。いかに相手のスキをつくか、虎視眈々と狙って。そういう時に、一流の研究者は、真正面から受けてロジカルに答える場合もあれば、フェイントをかけたり、逆襲したり、わざと答えなかったりとか」

それを聞いた上野さんは、「世界に向けて語る言葉」を持っていることです。

国連事務次長など長年にわたり国連で活躍された明石康さんも「口先だけの語学力では国際舞台での信頼は得られない。問われるのは、知識や教養、世界観など、人間としての総合力である」と仰っていました。

養老氏にインタビューをする古屋氏。

稿目の英語論文では、査読者に「ネイティブの英語だろう」と言われるくらい上達したとのことです。

天才チンパンジー「アイちゃん」の研究で知られる動物学者、松沢哲郎さんのお話も印象的でした。

京大大学院の哲学の試験では西洋哲学史の3巻組の本を、すべて英語で丸暗記して臨んだそうです。にもかかわらず、試験問題を目にして理解できたのは「それが英語だということと、スピノザという人名だけ」だったそうです（笑）。

それでも、問題文を何度も読むうちに「意味が見えて」きて、なんとか文脈が理解できたそうです。それから、20代初めの頃に哲学の英文テキストを読み漁ったことが英語の基礎体力を鍛え、おかげでのちに彼のフィールドである自然科学のテキストを読む時には、楽だったそうです。

「日本語だったら絶対負けないのに……」

上野千鶴子

このように、一流の研究者でさえ、「読み書き」の勉強には大変な時間と労力を費やしてきました。しかし、彼らが本当に苦しんだのは、「話す、聞く」ことだったようです。

『おひとりさまの老後』などで有名な社会学者の上野千鶴子さんは、英語の読み書き能力は自信があり、大学院生時代は仲間の論文を英訳するアルバイトをするくらいでした。

そんな上野さんでさえ、「話す、聞く」の壁は高かったらしく、「英語圏で勝負するのを断念した」と仰っていました。

上野さんは、初めて海外に出たのが、33歳からの米国留学でした。いわく、

「日常的な会話が全くできなかったんです。私は一生懸命しゃべっているのに、たとえば、スーパーマーケットのレジのお姉さんがけんもほろろな扱いをするんです。『Pardon, me?（なんですか？）』『Say it again（もう一度言ってください）』『I can not hear you（聞き取れませんでした）』、これを1日に1回は必ず言われる。1回ならまだ許容限度でしたが、3回言われたら、精神的に参ります。毎日つらい思いをしました。本気で泣きました」

「分かったふりをすることが一番いけない」

福島孝徳

上野さん、酒井さんのような苦労話を多く聞いた一方で、「神の手を持つ男」の異名をとる脳外科医、福島孝徳さんのお話にはとても親しみを覚えました。

取材直前、ネイティブと思われる福島さんの秘書から、少し先のウクライナでの手術のアポイントが電話で入ったのです。偶然、福島さんがその対応をしている場面に立ち会ったのですが、発音が〝カタカナ英語〟だったので驚きました。しかも、複雑な言い回しは一切なく、「イエス、アイウィルゴートゥーウクライナ」など、必要最低限の短い言葉を発するだけ。

電話を終えた福島さんは、「下手でしょ」と笑っていました。呆気にとられている私に、福島さんは「自分は英語が分からないから何回も聞く。必要なら筆談もする。分かったフリをすることが一番やってはいけないこと」という、英語に対するごくシンプルな考えを述べられました。

「ずっと〝日の丸英語〟を貫いてきた」という福島さんは、大事なのはネイティブレベルの上手な英語ではなく、〝通じる英語〟なのだ、と語っていました。

お話を伺った全員に共通するのは「自分の専門分野におけるべき」と語っています。

このほか、元宮城県知事の浅野史郎さん、宇宙飛行士の古川聡さんなど総勢12人のインタビューを終えて、多くの日本人にとっての「英語の壁」とは「ネイティブのように〟上手くしゃべりたい〟という自分の気持ち、願望」なのではないかと感じました。

これから英語に取り組もうという方々には、こうした気持ちを捨て去り、下手でも臆することなく自分をさらけ出して、自己流の英語でも「通じればよい」と開き直る強さを持ってほしいですね。そうすれば、きっと相手に〝通じる英語〟になり、英語の壁を乗り越えられると思います。

「キレイな発音より内容を理解して喋る」

坂東眞理子

昭和女子大学学長の坂東眞理子さんは80年にハーバード大学に研究員として留学した際、「発音の難しさ」に悩まされました。気の利いたことを言ったつもりが、発音がよくなかったせいで通じていなかったことも多かったそうです。

その悩みを克服したのは、98年にオーストラリア・ブリスベン総領事に就任した時のこと。英語のスピーチは、原稿をネイティブにチェックしてもらい、予行演習もしたそうです。ここで分かったのは、「大切なのは、キレイな発音ではなく、話す内容を理解して、自分の言葉で喋ること。すると、自然とスピーチに〝迫力〟が出る。〝品格あるジャパニーズ・イングリッシュ〟であると言います。酒井さんは、原稿を作って丸暗記したり、発音が上手ではなくても聞きやすい単語を選ぶなど工夫を重ねたとのことですが、今でも国際学会が近づくと、決まって悪夢を見るそうです。

やはり、「話す、聞く」は一流の研究者の方たちでも、大きな壁になっていたのです。それを乗り越えるには、特別な勉強ではなく、やはり「場数を踏む」ことが重要だと、みなさん語っていました。

時事通信社

今でも国際会議の前になると悪夢を見るとか（酒井啓子氏）。

時事通信社

明石康氏は「語学力だけではなく人間としての総合力が問われる」と語ったという。

【PROFILE】1977年、千葉県生まれ。筑波大学第一学群人文学類卒。出版社勤務などを経て、07年より英文校正サービスを提供するインド法人クリムゾン インタラクティブ勤務。現在、同社の日本法人の代表取締役。編著に、上記インタビューをまとめた「英語のバカヤロー！――「英語の壁」に挑んだ12人の日本人」（泰文堂刊）。